

2023年度 第33回こうさい療育・支援セミナー「生活を支える・家庭を支える」

実践報告③

「青年期にある人の『地域で生きる力』を引き出すために
～日中支援と生活支援の連携について～」

弘済学園グループホーム	管理者・サービス管理責任者	大倉 由寛
弘済学園デイケアセンター	管理者・サービス管理責任者	山崎 圭

2024年3月1日（金） 15：00～

弘済学園デイケアセンター

- ・ 2009年 生活介護事業所「弘済学園デイケアセンター」を開設
2018年 就労継続支援B型を開設し、多機能型事業所となる（定員 各15名）
- ・ 18歳で高等部を卒業後のしばらくの間は「能力開発が十分期待できる年齢」と捉えており、学習で得てきた力を礎に、一人ひとりの育ちに寄り添い「生きる力」を身につけることを目指す
- ・ それぞれにふさわしい暮らしの場、活動の場へのステップアップを目指し、いきいきと生きる人生のための支援を行っています
- ・ 支援のベース「能力内自立」「円満な人格形成」＝弘済学園のフィロソフィー
- ・ 現在の利用者状況＝障害の重い方が多い
生活介護 平均支援区分4.9 手帳 全員重度
就B 平均支援区分3.4 手帳 過半数が重度



弘済学園 グループホーム（咲楽ホーム）

- ・ 2020年6月14日に開設 介護包括型 入居定員5名 短期事業1名
- ・ 2年間の有期限のグループホームとして開設する
- ・ グループホームの目標は、在宅生活を豊かにし、持続させることを目的とし、将来グループホームを目指す際の課題の確認と解決も視野に入れている
- ・ 支援範囲は、生活の三原則の見直しからADL、IADL支援と幅広く捉えている。そのため、直接支援は支援職員が担っている
- ・ これまでの入居者の平均区分は、区分5.14



咲楽ホーム開設のきっかけ（１） 【課題への気づき】

弘済学園デイケアセンター（生活介護）

2014年

地域から支援学校高等部卒業生の通所受け入れ開始



家庭から通所してくる利用者支援を進める中で、
家庭生活をはじめ地域生活を送る上での
課題があることが散見された



咲楽ホーム開設のきっかけ（２） 【課題のある側面】

①基本的な生活習慣：家庭生活が基盤、生理的三原則が整っていない

- ・食事：偏食、高カロリー、食物繊維を摂らない→生活習慣病

- ・睡眠：寝付けずに日中に眠気が残る

余暇時間を上手く使えず早寝するため、

起床も早くなり通所時間まで持て余す

- ・排泄：便秘傾向のケースが多い

夜尿や日中に失敗するケースもいる



咲楽ホーム開設のきっかけ（3） 【課題のある側面】

②情緒

- ・ 生理的三原則の乱れに起因する場合が多い
→ 残眠から覚醒せず、不快因子があると即反応してイライラ
- ・ こだわりが強い
→ 応じることが困難
- ・ 耐性の弱さ
→ 不本意に感じると譲れずにイライラ



咲楽ホーム開設のきっかけ（４） 【課題のある側面】

③-1 ADL

できる力を持っていても、経験の乏しさから積み上げていない

- ・ 入 浴：自分で洗う習慣がない

スキルを得られる力があっても全面介助

家族の体力も限界

異性の家族が介助することに違和感を覚えない

- ・ 歯磨き：スキルを得られる力があっても大半が介助

自主性に任せている＝スキルは不完全

医療にかかる経験が少なく、通院ができない



咲楽ホーム開設のきっかけ（５） 【課題のある側面】

③-2 IADL

できる力を持っていても、経験の乏しさから積み上げていない

- ・ 洗濯：スキルを持ち合わせていても、経験や習慣がない
家庭では「やってもらうことが当たり前」
→自分で洗濯する必要がない



- ・ 交通機関・電話の対応、利用
：スキルを持ち合わせていても、経験や習慣がない
リスクを気にするあまり、一歩が踏み出せない

咲楽ホーム開設のきっかけ（6） 【課題のある側面】

④家族関係

- ・我が子が20歳を超えても、認識は幼少期と変わらない
- ・家族「青年期にふさわしい関わり方」を意識したり
本人「大人としての自負、自覚」を持つことが大事だが…
→現状の生活の中では、双方がお互いを見つめ直す時間が
持てず、意識が変わらない
- ・本人の介助などに日々追われてしまい、
将来について考えたり、取り組む時間がない



咲楽ホーム開設のきっかけ（7） 【課題のある側面】

⑤余暇

- ・ 家族が同伴することが、体力的に難しくなっている
- ・ 本人が関心を示すものがない
→何もしない、食べることしかない、インドアでの過ごし増える

⑥短期入所：レスパイト、家庭以外での生活経験の積み上げ

- ・ 弘済学園以外の短期入所：日中活動にほぼ参加していない様子
- ・ 弘済学園の短期入所：
入所児の低年齢化、青年期の過ごしに合わない



咲楽ホーム開設のきっかけ（８） 【認識できた課題に対して】

課題を認識していてもアプローチができない

通所事業所

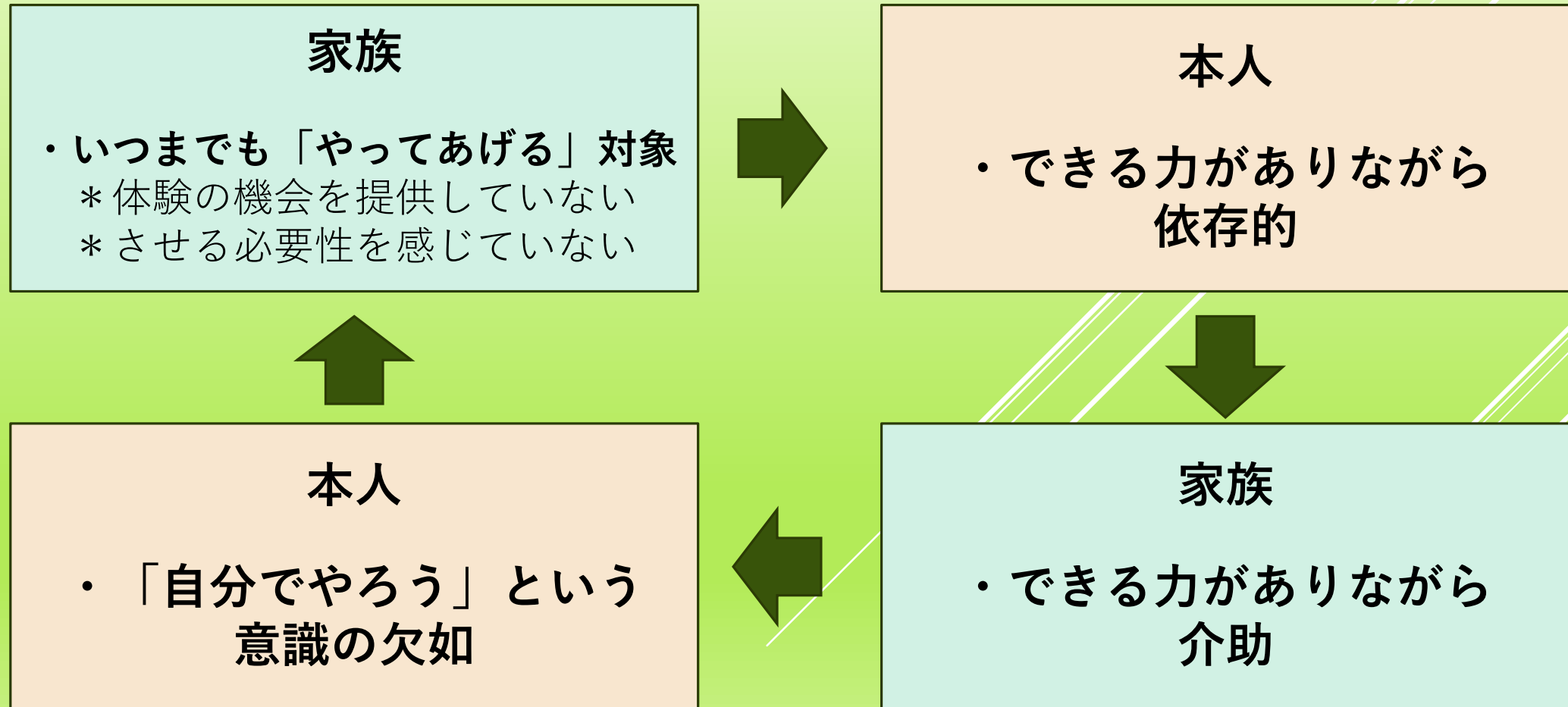
- ・ 支援できる時間は日中の時間帯に限定される
- ・ 生活領域のプログラムを増やすことには限界がある

家庭

- ・ 現在の生活を継続しながら改善することが難しい
- ・ 短期入所などの短期間での分離では習得や定着に至らない

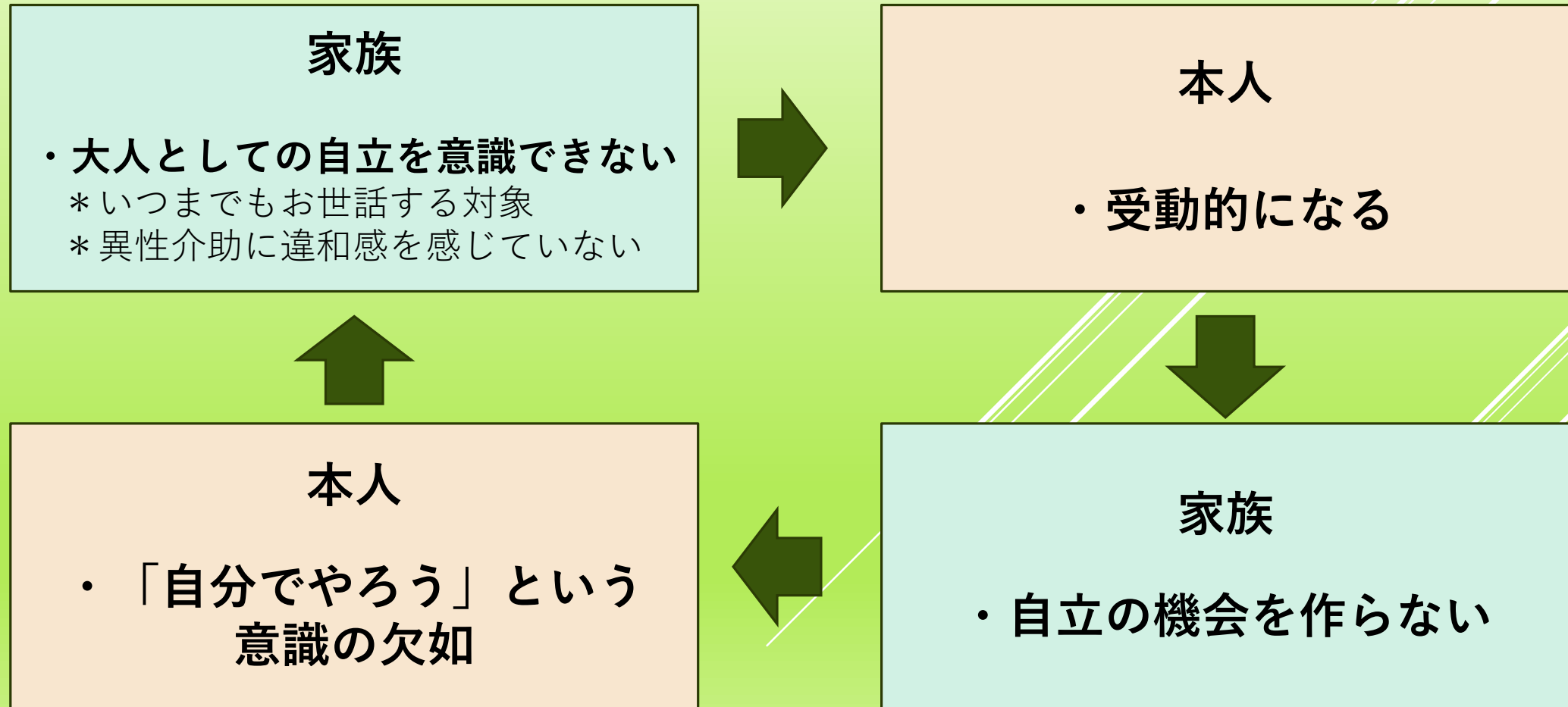
家庭生活での課題改善が難しい理由①

①ADL・IADL



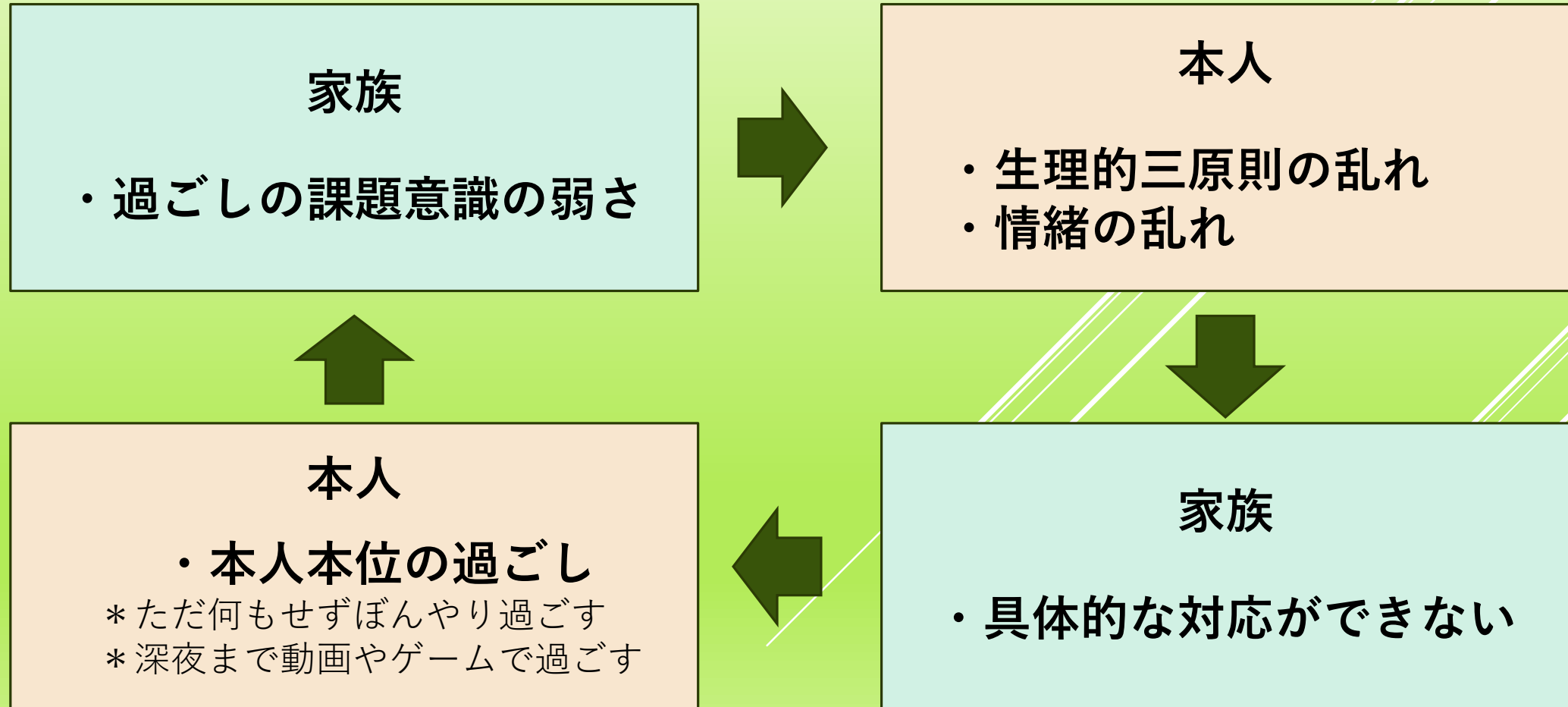
家庭生活での課題改善が難しい理由②

②家族関係



家庭生活での課題改善が難しい理由③

③過ごしと情緒の関連



ニーズに対して有効な支援を提供するための運用方法

①支援方針の統一

デイケアセンターとグループホームとの連携を密にとる＝24時間同じ支援

②福祉支援職員による支援

日々の状態を捉え、支援の有効性の確認

③有期限

生活力をつけて、ステップアップすることを目的にする

④アフターフォロー

ご家庭に戻った後も短期入所で状況を確認したり、レスパイトニーズにも対応

地域で生きる力を付けるための連携とは



- ・ 支援を必要とする利用者の生活は、常に連続している
- ・ 各事業所の支援は、一定の時間帯を担っている
- ・ 利用者を中心に据えた連携が必要

A D L と環境調整や治具の活用



幼児期



児童期・青年期



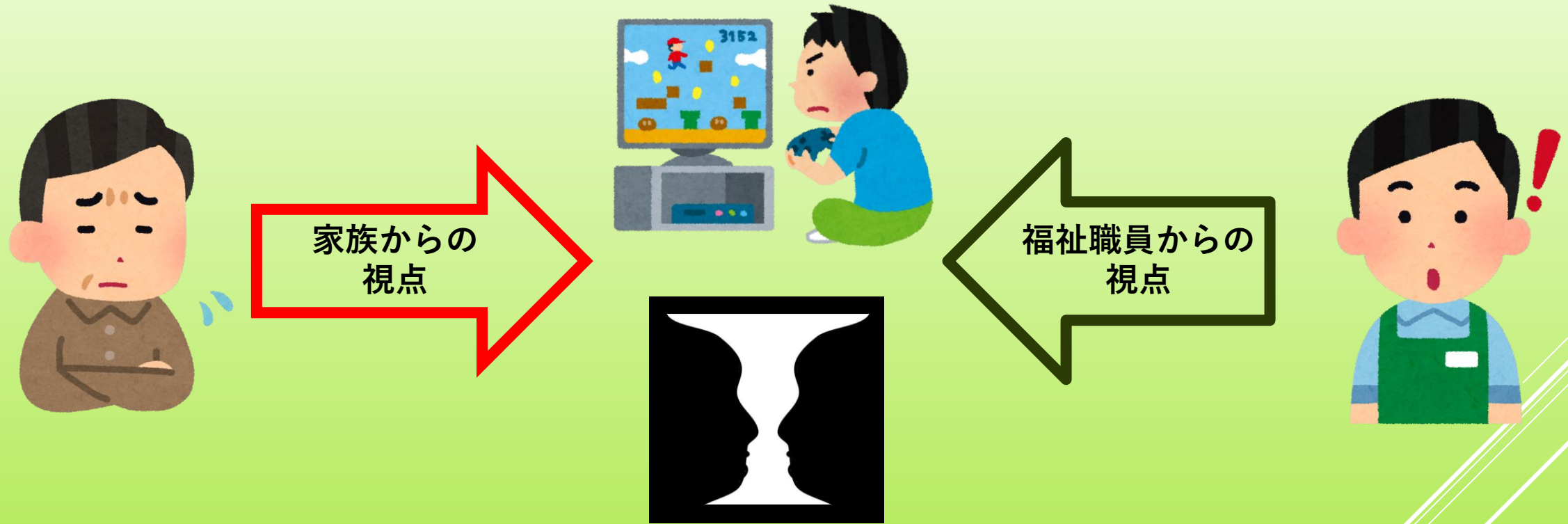
成人期

ADL

環境調整や治具の活用

支援内容は成長に合わせて変化していくが、
年齢で区切ることなく連続体で捉えていくことが大切

生活リズム



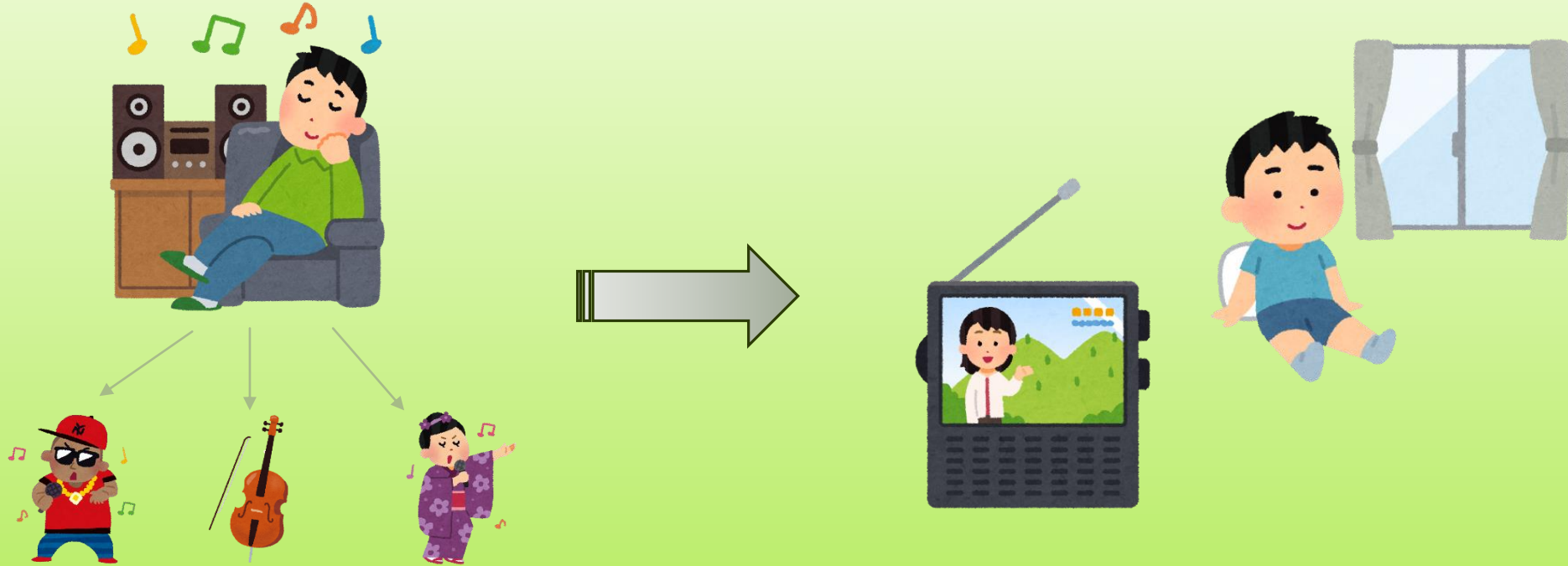
- ▶ 問題としていた課題は、視点を変えることで、異なる捉え方をすることができることもある。家族、支援者、相談など異なる立場の関係者が多いほど有効なリフレーミングができる。

生活の導線



- ▶ 部屋に専用のボードを用意して絵カードを掲示する。
- ▶ 活動毎に絵カードで内容を確認してから行動する。
- ▶ 活動を終えた絵カードは、フィニッシュボックスへ入れる。
- ▶ 絵カードが、予定を知る情報源だということを経験を通して理解していけるとイベント事にも利用していけるようになる。

余 暇



- ▶ 余暇が一人で上手に過ごせないとグループホームでの生活は難しい。
- ▶ 良い余暇の過ごし方ができるようにするためには、興味関心を探る工夫が必要。切っ掛けづくりと観察の支援は欠かせない。
- ▶ 休息も大切な一つではあるが、常に休息だけでは余暇にならない。

有効だった点

- ・ **事業所間の連携**

有効な支援は、積極的な連携により生まれる

- ・ **家庭との連携**

家庭でのリフレーミングの機会となる
将来への正しい意識の持ち方に繋がる

- ・ **ADLの獲得**

自主的な姿が増えている

- ・ **絵カードを利用した自主的な生活**

他のグループホームへ移行する際にも有効

課題となった点

- ・ **家庭に支援を引き継がない**

自信がなく不安が残る、家庭内で理解に差がある

- ・ **一律の利用期間**

利用する方によって必要とする期間に差がある

まとめ

デイケアセンターとグループホームとの連携

- ・事業所の支援の目的の違い、利用者の姿の違いを共有
→互いの視点・評価の尊重からリフレーミング、利用者の捉えが深まる

ご家庭との連携

- ・長年の課題の解決と、将来に向けての課題の確認と取り組みの実施
→ご家庭が将来に向けて自信を持つことにつながっている

ADL支援について

- ・ADL支援は二十代後半までを視野に入れて取り組むことが有効
→しかし吸収の早い児童期とは異なり、獲得した能力を活かす環境調整や
治具の作成などを通してADLの確立を目指す必要がある